

## モンゴル時代の敦煌とシルクロード ——杏雨書屋所蔵「羽 776-13」とその周辺——

松井 太 (大阪大学人文学研究科)

<https://researchmap.jp/dmatsui>

- 敦煌文献：莫高窟第 17 窟（～11 世紀初頭）＋莫高窟北区（～14 世紀末＝モンゴル時代まで）
- モンゴル帝国時代（13～14 世紀）のユーラシア（『新世界史』山川出版社, 2023, p. 104）



### ●マルコ＝ポーロ『世界の記』の伝える敦煌

「今言った沙漠のこの三十日行程を騎行すると、サチオウ【＝沙州＝敦煌】という市があり、グラン・カアン【＝元朝皇帝】のもとにある。地方はタングトと呼ばれる。皆偶像崇拝である。が実際には、ネストリウス派キリスト教徒がいくらかいる。サラセンもいる。偶像崇拝者は固有の言語を有する。市は北東と北の間にある。商売で生きる者たちではなく、土地から得る穀物の益で生きる。修道院や僧院がたくさんあり、どれも様々な種類の偶像でいっぱい、それに大変な犠牲と荣誉と[敬意]を捧げる。いいですか、子供のいる者は皆偶像を称えて羊を飼うのですよ。そして年の終わりがその偶像の祭りの時に、羊を飼っていた者は子供とともにそれを偶像の前に連れてゆき、彼らも子供とともに大いに敬意を捧げる。これが済むと、それを全部料理させる。その後それをとて恭しく偶像の前に持って行き、偶像が息子を守ってくれるよう祈禱とお祈りを唱えるのだが、その間そこに置いておく。そして、偶像が肉の精髓を食べるのだと言う。それをした後、偶像の前にあったその肉を取り、自分の家が好きなどころに持ち帰り、親戚を招き、大変な敬意と盛大な宴会でそれを食べる。肉を食べると骨を集め、櫃にとても安全に仕舞っておく」（高田英樹訳、名古屋大学出版社, 2013, p. 119）

### ●『松漠紀聞』にみえる甘肅河西地方のウイグル仏教徒（12 世紀前半）

回鶻ウイグル、自唐末浸微、本朝盛時、有入居秦川爲熟戸者。女真破陝、悉徙之燕山。甘・涼・瓜・沙（敦煌）、舊皆有族帳、後悉羈縻於西夏（タングト）、唯居四郡外地者、頗自爲國、有君長。……多爲商賈於燕（北京）、載以橐駝過夏地。……奉釋氏最甚、共爲一堂、塑佛像其中、每齋必到羊、或酒酣以指染血塗佛口、或捧其足而鳴之、謂爲“親敬”。誦經則衣袈裟、作西竺語、燕人或俾之祈禱、多驗。

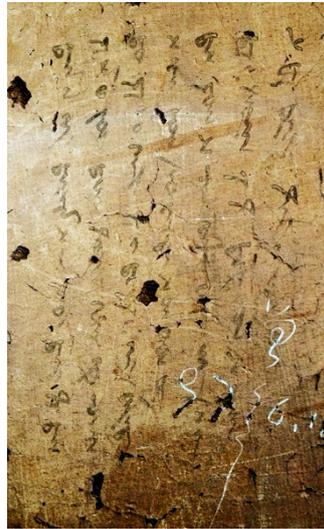
●敦煌莫高窟とその近辺に残された多言語資料の例

①莫高窟近郊の「慈氏之塔」の落書き（10～12世紀頃）



上：チベット文字チベット語  
 中：ブラーフミー文字梵語  
 下：チベット文字ウイグル語  
 「サンガセーナなる持戒者が（ここに）至った。」

②榆林窟（瓜州，敦煌の東隣）第16窟  
 キリスト教徒題記（シリア文字ウイグル語）



- ① 猿年第五月十五日に。私達
- ② 瓜州のブヤンテミユル、ナタニイル、ヨハナンが
- ③ この瓜州の山寺に来て
- ④ 二日間（石窟を）巡って、3つの麦酒と
- ⑤ 1頭の羊の食事でもって跪拝して、再び戻って
- ⑥ 行った。記念となれ。アーメン！
- ⑦ 永遠に至るまで。アーメン！

③敦煌莫高窟北区163窟出土モンゴル語文書



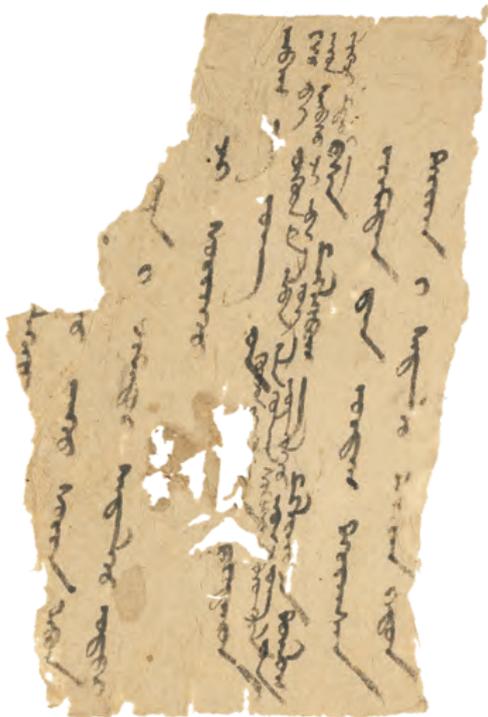
- ① ……ポラトのおおせにより
  - ② ……ケドメンバートル「われらが」ことば。
  - ③ ……に、……のテゲ、トクテムル……
  - ④ ……に、……の軍人たちに。この
  - ⑤ ……多くの軍人たちに。この
  - ⑥ 灌頂国師ドルジキレシスバルサンポラマは、……沙弥たち
  - ⑦ と共に、高昌方面のバルクル・北庭などへ往来しつつ
  - ⑧ その仏事に行つて往来するときの祝祷の
  - ⑨ ため、誰であろうと引き留めるな。彼らの荷物・ラクダ・
  - ⑩ 馬を、駅伝馬・糧食だといって奪い取るな。彼らの何
  - ⑪ ものを奪い引つ張つて取るな、と言つた。このように
  - ⑫ 言わせて、これら灌頂国師ドルジキレシスバル
  - ⑬ 「サンポラマ」……その沙弥たちと共に高昌……
- 〔後 缺〕

※『明太祖実録』卷87・洪武七年（1374）五月庚辰「和林國師<sup>ドルジキレシスバルサンポ</sup>朵兒只怯烈失思巴藏<sup>ト</sup>（rdo rje bkra shis dpal bzang bo）及甘肅平章汪文殊奴等，至京師。國師獻佛像・舍利及馬二匹。詔以佛像・舍利送鍾山寺，賜國師文綺禪衣」



●杏雨書屋新収モンゴル語文書：羽 776-13（図録 p. 36）

19.0 x 12.5 cm, Beige, 漉き縞の無い中質紙, 上端・下端完, 左右缺; 5a~5d の挿入→草稿



- ① ② ③ ④ ⑤ **アバガ王**の………持っていけ。  
 ⑥ ⑦ ⑧  
 「後 缺」  
 穀物を管押して、穀物がどれだけ  
 イラマダンらがオルトク（として）耕作した  
 またマンライブカ、メンリホージャ、トウグルク、  
 お前は（それらを）収集して  
 ……をお前のところに管押して行った。  
 ……醸造して（？）、二十五  
 ……はたらく者（？）………  
 「前 缺」
- ⑨ 令旨を識ること。  
 ⑩ 人たちを出すなら、お前は**アバガ王**にお知らせして、**アバガ王**  
 ⑪ もし従臣たちに、差役 馱伝馬と食糧、上馬する（？）  
 ⑫ 力役、

⑤ 「アバガ王 (Abaya ong)」：イル=ハン国第2代君主（位 1262-82，世祖クビライの甥）か

- 1265年9月，父フレグ（初代イル=ハン，クビライの弟）の死後「アバガは『我らの長者（*aqa*「兄」）はクビライ=カアンである。彼の命令無しに即位式はあってはならぬ』と言った。……（アバガは）帝冠と玉座の占有者であったが，クビライ=カアン陛下からの使者が到着し彼の名による勅書（*yarliḡ*）が届くまで，椅子に座って命令を発していた」（『集史』アバガ紀）
- 1270年11月6日「この日にはカアン近侍の使者も到着し，（アバガ）自身の善き父の代わりにイランの地のハンとなって父祖の道を歩むよう，アバガ=ハンのための勅書（*yarliḡ*）と帝冠と栄誉がもたらされた」（『集史』アバガ紀）
- 「至元八年（1271），世祖遣使徵砲匠於宗王阿不哥，王以阿老瓦丁・亦思馬因應詔，二人舉家馳驛至京師」（『元史』卷203・工藝伝）
- 至元十年（1273）正月己卯「詔遣扎朮呵押失寒・崔杓持金十萬兩，命諸王阿不合市藥獅子國」（『元史』卷8・世祖本紀5）
- 「初，太祖（*Činggis-qan*）以隨路打捕鷹房民戸七千餘戸撥隸旭烈大王位下。中統二年始置。至元十二年（1275），阿八合大王遣使奏歸朝廷，隸兵部」（『元史』卷85・百官志1・兵部・管領隨路打捕鷹房民匠總管府）
- 至元十七年（1280）正月「賜諸王阿八合・那木干所部，及征日本行省阿剌罕・范文虎等西錦衣・銀鈔・幣帛，各有差」（『元史』卷11・世祖本紀8）
- 至元十七年（1280）初頭（？）「（クビライ=）カアンの治世においてキリスト教徒（*tarsā*）たちはイスラーム教徒に対してきわめて不寛容であり，彼らを攻撃するためカアンに『多神教徒を皆殺しにせよ』という一節が『コーラン』にあると上奏した。カアンが怒って「どうしてお前たちは（このように）言うのか？」とおおせになると，彼らは「この件に関する書簡がアバガ=ハンから届いている」と言った（『集史』クビライ紀）

②③の語解は確定できないが、「醸造」→飲料（ブドウ酒その他）の送達に関係？

⑥～⑧「オルトク」と穀物の耕作： 古代ウイグル語のオルトク (ortoq > ortay > 斡脱) は「パートナー、仲間」の意 →モンゴル時代の諸種史料では「(モンゴル帝室の) 仲間＝御用イスラーム商人 (の集団)」を意味することが多い (本文書⑦イラマダンもイスラーム教徒名)。

→ただし新疆出土の古代ウイグル語文書やイラン発現のモンゴル語文書には、農地経営に関わる「荘園管理人；小作人」としての用例もある。

→本文書ではフレグ家 (=イル=ハン国) の東方領とその管理運営者に関係するか

- ・伯徳那：「諸王旭烈引重兵鎮朔方，公美髯長大，勇冠軍，王奇之。……初，河東陝右民賦之隸王者，以重哈刺總管之，附治解州，乃以公爲副。……癸丑，貢職。王嘉公識大禮且辯捷，可代重哈刺總管」(程鉅夫『雪樓集』卷 18・大元河東郡公伯徳公神道碑銘)
- ・田文鼎：「歲壬子，輔國賢王定封彰徳爲分地。擢用賢雋，特授公爲本道課稅所經歷」(王惲『秋澗先生大全文集』卷 49・大元故蒙軒先生田公墓誌銘)
- ・哈只哈心 (Hağğ Hāšim, イラン出身) 「隸王旭烈邸，從戰必捷，屢入奏稱旨。歲丁巳，割彰徳路爲分地 (正しくは 1252 年壬子)。江南平，益以寶慶路。王邸在極西絕域，遣使必慎擇其人。以公偕魯思檐木子古里沙的入覲計事」(許有壬『至正集』卷 53・西域使者哈只哈心碑)
- ・1259-60 年に「彰徳府宣課使」常德がフレグを訪問 (王惲『秋澗先生大全文集』卷 94・玉堂嘉話・劉郁『西使記』; cf. 松田孝一 1980) ←本文書⑧「穀物がどれだけ……」

→おおよそ 1270～80 年間におけるイル=ハン国とその東方領の通信・連絡の実情を示す可能性

### ●まとめ

- ・モンゴル時代の「シルクロード」：内陸経由の交易・通商・運輸，信仰・巡礼，政治・情報
- ・敦煌をはじめとする内陸アジア出土文書：多言語・多文化にまたがる資料群：世界各国 (敦煌，北京，パリ，ロンドン，サンクトペテルブルク，日本) のコレクション
- ・モンゴル語・古代トルコ語・漢文史料に関する日本の研究の国際的優位

### 参考文献

彭金章・王建軍・敦煌研究院 (編) 『敦煌莫高窟北区石窟』全 3 卷，文物出版社，2000-2004.

松井太「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット仏教徒」『内陸アジア史研究』23, 2008, pp. 25-48.

松井太「トルキスタン・トルコ系諸集団とモンゴル帝国」『岩波講座世界歴史 10：モンゴル帝国と海域世界：12～14 世紀』岩波書店，2023, pp. 133-158.

Matsui, Dai. *Old Uigur Administrative Orders (Berliner Turfantexte XLVIII)*. Brepols, 2023.

Matsui, Dai. Uighur Sources. In: M. Biran & H. Kim (eds.), *The Cambridge History of the Mongol Empire, Vol. II: Sources*, Cambridge University Press, 2023, pp. 341-359.

Matsui, Dai. Old Uyghur Graffiti Inscriptions from Central Asia. In: O. Škrabal et al. (eds.), *Graffiti Scratched, Scrawled, Sprayed: Towards a Cross-Cultural Understanding*, De Gruyter, 2023, pp. 173-214.

松井太・荒川慎太郎 (編) 『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2017.

松田孝一「フラグ家の東方領」『東洋史研究』39-1, 1980, pp. 35-63.

宮紀子『モンゴル時代の知の東西』下巻，名古屋大学出版会，2018.

森安孝夫『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会，2015.

森安孝夫『シルクロード世界史』講談社，2020.